
思い出また明日

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出また明日

【Nコード】

N6449Z

【作者名】

落ちぶれた天使

【あらすじ】

コナンと組織の最終決戦！？
なのだ・・・

キーボード

解毒剤も組織へもおとさたないまま半年がたった。もうすぐ2年生になってしまう。

コナンは窓の外をみながらボーっとしていた。

それを蘭が悲しそうな顔でみつめる。

小五郎はこのなんだかやな空気にゴクリとつばをのみこんだ。ふと事務所の下をていたんの制服をきた生徒が歩いていた。

コナンはかなり悲しげな、懐かしそうな顔をして、携帯を窓のそとに顔を出しながら新一用の携帯をいじっていた。

なぜかあまりに考え込みすぎて小五郎や

蘭がすぐうしろにいることにもきずいていない。

しばらく携帯をいじっているとコナン用の携帯がなりだす。

コナンは新一よりの携帯をもったまま、コナン用で電話にこたえた。

コナン「もしもし？」

平次「あゝ俺や俺。いまから東京駅きてくれへんか？」

コナン「・・・は？・・・」

平次「せやから東京駅に和はときてるんやつて。はよーしてくれや。」

「

コナン「・・・きるぞ・・・」

平次「つちようまちイ！?!?!?!」

コナン「つつつせえなあ。たく、なんでいちいちコナン用にかけるんだよ。新一用にかけるっての。てかさ、携帯の地図でこいよ。こ

こ5丁目だ。」

平次「なんやつめたいのお。近いやんけ。いつか運動不足になんて工藤。」

コナン「うるさい。わあったよ。いまいくからまってる・・・じゃあな。」

コナンは一方的に電話をきって事務所をとぼとぼでていった。

コナンは正直いま平次に会いたくなかった。

現役の高校生で、しかも同じ探偵となると自然とむなしくなってくる。

コナンははあっとおおきくため息をつくとゆっくりあるいていった。コナンからはどす黒いオーラがはなたれ、通行人の目をうばっていたことは言うまでもない。

駅につくと遅いぞといわんばかりの平次と和葉がいた。

だが二人ともコナンをみると冷や汗をたらした。

コナン「・・・いこつか・・・」

コナンはそれだけいうと歩いていく。

平次もかずはも一切しゃべらずただコナンについていった。

家につくとでむかえた小五郎と蘭がさつきにましてどす黒いオーラをはなつたコナンをみて口をむすんだがコナンは考え事をしているため一切きかず、台所にむかつて熱いブラッグコーヒーをいれてパソコンにむかつていきただ1人でキーボードをならしながらコーヒーを飲んでいた。コナンの態度が尋常でないと考えた小五郎たちは探偵事務所においていった。

蘭「どうしたんだろうコナン君・・・」

かずは「あれは尋常やあらへんよな・・・あ、蘭ちゃんあめちゃんたべる？」

蘭「ありがとう。」

小五郎「とりあえず一回話しかけてみるか・・・」

小五郎たちはまたコナンのもとへもどつていった。

コナンはあいかわらずキーボードをたたいている。

小五郎が試しにはなしかけてみた。

小五郎「な、なあコナン。」

コナンはゆっくりふりかえるとさつきの倍にましたどす黒いオーラをだしたままふりむいて小五郎を鋭くにらんだ。

コナン自身はにらんでいる感覚はまったくくない。

コナン「・・・なあに？おじ、さん・・・？」

全員このにらみにはおびえた。

小五郎「い、いいいいやなんでもない！俺や蘭たちはマージャン
いってくつからな！ラーメンつくってたべろ！！」

小五郎はそういうとそそくさといえをでていった。

それにつづき他のめんばーも家を出て行く。

コナンはまたキーボードをならしだした。

荷造り

家に小五郎たちがかえってくるとコナンはまだパソコンをやっていた。

あのだす黒いオーラは少しだけよくなり、小五郎たちはほっと胸をなでおろした。

コナンは帰ってきたことにきずかないほど集中してキーボードをうつっていた。

コナンは探偵団にたのまれた、いろいろな薬品について説明してほしいとのことを全部フロッピーにうちこんでいた。

中には子供、いや大人でも分からないほどの数式や言葉、現象や薬品名などがかいてある。

そのときコナンの携帯がなった。

コナンはディスプレイに灰原とかがかいているのを確認すると電話にでた。

コナン「もしもし」

哀『子供達に頼まれてたの終わつたの？こっちは一応実験の準備はおわつたけど。』

コナン「あと少し。あいかわらずガキのなかでお勉強会とは。しかも2回目の小学校だぜ？きずかれするよ・・・」

哀『たしかにね。』

コナン「大体5+5は？わかんない、とかやってるやつらとお勉強たあ・・・悔しい限りだぜ・・・組織の情報もぜんぜんはいつてこねえし。FBIのほうもほとんどつかめてねえみていだしよ。」

哀『同感ね。組織のことで新しい情報がはいつたわ。』

コナン「なに！？」

哀『私たちのこと、ばれてきたみたい・・・たまたまとおりがかつた構成員に私たちの顔をみられ、それで宮野志保そっくりの私と工藤新一そっくりの貴方が存在することがわかつたところだと思う』

わ。貴方もしつてるとおもうけどここ1週間だれから視線をかんじたり、学校にいるとき、誰かに私や貴方、とおくからとられてるみたいだし・・・」

コナン「え、最近考え事してたからきずかなかったぜ……」

哀「さつき私がお風呂はいつてて博士がコンビにいつてたとき、組織が私の指紋をとりに来たのよ．．．だからあなたも、すぐそこからでて、ホテルでもどこでもいいから避難するのね．．．いま私も博士もホテルだから。」

コナン「いまうちに服部たちがきてるんだよ……早く非難しねえとあいづらも巻き添えにつてえ!？」

コナンはやっぱりとうしろに小五郎たちがいるのにきがついた。

あわてている平次がいみんなふしぎそうにコナンをみている。

コナン「やべ、電話の内容おっちゃんたちにきかれた・・・」

哀「はあ！？とりあえず蘭さんのお父さんにかわつて。」

コナン「ん？お、おう……。おじさん、灰原がおじさんに。」

コナンはそういうと小五郎に携帯をわたした。

小五郎「もしもし。」

哀「いまから米かホテルにきなさい。そこでしばらく寝泊りしなさい。い。」

小五郎「はあ!？」

哀「いいからしにたくなければとまりなさい、　　っていつてるのよ！
！！！！！！！！」

小五郎「はい！！！」

哀はそうすると電話をきった。

小五郎は仕方なく荷物をまとめはじめた。

出費のことをかんがえているらしい。

するとコナンは財布から父親のカードをだして小五郎にわたした。

コナン「こ、これつかって……！それとはやくして……！」

小五郎「お。おいなんでこんなカードおめえもってんだ!？」

コナン「親父のだよ!!!とにかくはやく!!!」

コナンも平次もかなりあせってみんなにづくりさせる。

小説

ホテルにつくとコナンはベッドに座り、ぼーっと考え込んでいた。いまはちょうど冬休み。

学校がないのが不幸中の幸いだろう。

電話の内容については平次がうまくごまかしてくれたため、詮索はされなかった。

平次はコナンの顔色をうかがっている。

かずはと蘭は大浴場に、小五郎はしたのレストランにのみにいつている。

部屋も小五郎、平次、コナンとラン、かずはというようにわかれていてひとつうえのかいに博士たちがとまっている。

コナンはかなり深く考え込んでいた。

コナン「完全に、不利な状況、だな・・・」

平次「へ？」

コナン「いま、俺や灰原のまわりに人が多すぎる。そして一番不利なのは服部という色黒男がここにいること・・・」

平次「せやな・・・てえ!？」

コナン「はははははは!！」

コナンはいきなりおなかをおさえて笑い出した。

平次は顔にいきなりまくを数個浮かべて湖南にどなった。

平次「おい自分!こんなときになに冗談いつとるんじゃばけえ!？」

!?!?!」

コナン「ふう。なんとなく元気だ。」

平次「へ？」

コナン「いや、いつもの服部だなぁっておもってた。」

平次「ふうん。で、しばらくお前はここににいるんか？」

コナン「いや。一回ふだけ俺も蘭も明日、学力テストなんだよ。だから明日は登校。たく、なんで1年生のお勉強を・・・」

平次「そーか、じゃあおつちゃんたちは俺とかずはにまかしとき」
コナン「ああ。たのんだよ。じゃあ俺もうねるわ。だれかさんがア
ポなしできたせいでつかれた。」

コナンはそういうとベッドにはいつていった。

とおもったらいきなりできて今日発売された小説をよみはじめた。
さつきにくらべて目はパツチリとひらいている。

平次はあきれるとベッドにはいつて寝てしまった。

このあとコナンが小説を朝まで徹夜で読んだのはいうまでもない・・・

テストわ当たり前

コナンと蘭は学校にホテルから登校していった。

コナンは何回もあくびをしていたが。

「小学校」

コナン「はよ……。」

コナンはそっけなく探偵団の全員にあいさつするとせきについた。みんなテストのことで頭が一杯そうで、暗い顔をしている。

ただ哀はへいぜんと読書、コナンはいまさら睡眠をとっているが。

小林せんせいがいっけてくるとみんなしずかになって席につく。

小林先生はコナンをみると呆れ顔だったが。

小林「はい、みんなテストくばるわね」

コナンは哀にたたきおこされ、5分かからずに問題をしあげるとさっそく寝ていた。

小林せんせいは、生徒のあいだをまわりながら、コナンと哀の近くをとおるとたびたびおおきいため息をついたとか。

テストがおわると下校になった。どうやらテストは夕方、各自の家に1年生あつとどくそうだ。

コナンはホテルの事情を説明してホテルの場所をかいて哀や、探偵団と帰路についた。歩美たちはテストがといたらホテルのロビーでおちあつと決定し、別れた。

「そして夕方」

ホテルのロビーにらんやかずは、平次に哀、探偵団とコナンがいた。

歩美「じゃあさ、一斉のーせいで！でみせあおう！」

光彦「そうですね！！」

歩美「じゃあいくよ！いつせいのーせいで！」

らんたちがおもしろそうにコナン達をのぞいている。

コナンと哀はなかばめんどくさそうにテストをだした。

歩美はオール87点だった。

光彦はオール90。

げんたは・・・オール3。

コナンはもちろんオール100。

哀もおなじだった。

蘭「わぁ、コナン君、すごいじゃない！！あれ、でも私、コナン君がべんきょうしてるとこ、みたことない・・・」

げんた「コナンは授業中もねてるか本よんでるかだもんなー！！」

光彦「まったくです。そのくせして先生にさされても即答えをだしますし。」

歩美「いーなー」

平次はなかばからかうような顔になってコナンを横目でみながら、

平次「まあ、あたりまえやな。」

といった。

コナンはそれに鋭くにらみかえす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6449z/>

思い出また明日

2011年12月21日21時57分発行